

ハイデガー・フォーラム第2回大会2日目（2007年9月23日・京都大学）

特集 「アリストテレス—ハイデガーと古代ギリシア」

発表原稿

なぜ若きハイデガーは『動物運動論』を「広範な基盤」として『魂について』と『ニコマコス倫理学』を解釈する計画を『ナトルプ報告』で立てたのか

坂下浩司（南山大学）

## 目次

はじめに——アリストテレス論第2部構想をめぐって

第1章 『ナトルプ報告』への「付論（Beilagen）」の分析の開始——アリストテレスのどの著作のどの箇所へ何度言及しているのか

第2章 ハイデガーが「付論」において『ニコマコス倫理学』第6巻第2章（EN. VI. 2）に何度も言及する意図は何か——本発表の解釈の方向性

第3章 「付論5」および「6」の分析——「根本現象」としての「プロアイレシス（選択）」と実践的三段論法について

第4章 「プロアイレシス」が登場する「付論」の分析——「オレクシス（欲求）」の重要性

第5章 『ニコマコス倫理学』、『魂について』、『動物運動論』における「実践的三段論法」論の特徴——そのことが若きハイデガーにとってもった意義について

付録 生と世界を関係付けるものとして若きハイデガーが生物の「進行方向」に着目していることについて——世界への生物の依存と世界の生物による再構成、『動物進行論』の意義

〔発表では全文ではなく必要な部分のみ読み上げます。最後の「付録」は当日時間の関

係で読めないかもしれません。なお、「本発表の仮説（１）」と「仮説（２）」は２７頁に、「仮説（３）」が３０頁にまとめてあります。]

## はじめに——アリストテレス論第２部構想をめぐって

[ここは事前にフォーラムのホームページで公開されている「レジュメ」とほぼ同じなので、発表では、要旨を説明するだけにして、第１章へジャンプします。]

1922 年秋に成立した『ナトルプ報告』のアリストテレス論構想を見ると、その第１部は『ニコマコス倫理学』『形而上学』『自然学』、第２部は『形而上学』『動物運動論』『魂について』そして再び『ニコマコス倫理学』を解釈することが計画されていたことが分かる。

[T 0<sup>1</sup>]「本研究の第二部では、解釈の重点を『形而上学』第七巻、第八巻、第九巻に置く。……[中略]……ついで、この存在論的な地平の中に『[ニコマコス]倫理学』を置くことによって、同書が、人間存在、人間の生、生という動性をもった存在者の解明であることが明らかにされる。それは、まず先に、生という存在分野が特定の動性であることを解明し（『動物運動論』の解釈）、その広範な基盤の上に立って『魂について』をその存在論的＝論理的な体制に向かって解釈するという手順でなされる。」(GA62, 397. 『思想』版高田訳<sup>2</sup>、39 頁。強調は発表者。)

高田氏の邦訳も Van Buren の英訳<sup>3</sup>も、この箇所注をつけていない。しかし、第２部のこのリストは非常に興味深いと思われる。

まず、古代哲学史の知識がある人にとって興味深いはずである。『形而上学』、『ニコマコス倫理学』、『魂について』は、アリストテレスの主著として知らぬ人のない大著であるが、これらと比べると、『動物運動論』は、ボリュームの点だけみても片々たる小著であり（ベッカー版アリストテレス全集で６頁しかない）、また知名度の点でもかなり見劣りするように思えて、なぜこのような小篇が３つの主著と肩を並べるように言及

<sup>1</sup> 「T—」は、本発表におけるハイデガーの引用の整理番号。T 0 から T 37 までである。

<sup>2</sup> 高田珠樹訳、マルティン・ハイデッガー「アリストテレスの現象学的解釈——解釈学的状況の提示——」、『思想』、813 号、1992 年 3 月、岩波書店、pp.4-42。

<sup>3</sup> Van Buren, J. (ed.), *Martin Heidegger, Supplements: From the Earliest Essays to Being and Time and Beyond*. SUNY, 2002. p.143.

されており、また、『ニコマコス倫理学』や『魂について』の解釈にとっての「広範な基盤」になるのだろうか？と興味を持つであろう。

さらに、アリストテレスの専門家にとっても興味深いはずである。『ナトルプ報告』が書かれたのは、1922年。しかし、アリストテレス研究者として著名なイエーガーが、長い間偽作の疑いをもたれてきた『動物運動論』の真作性を論証したのが、その9年前の1913年のことなのである<sup>4</sup>。ハイデガー自身、1926年夏学期講義『古代哲学の根本諸概念』で、『動物運動論』、アリストテレスの真著。これはW・イエーガーが証明した」と述べた記録が残っている<sup>5</sup>。当時の最新のアリストテレス研究の成果をきちんとフォローしているだけでも特筆すべきことであるが、『動物運動論』を、アリストテレスの主著の解釈にとっての「広範な基盤」にするほどに重視する点が驚くべきことなのである。というのは、現代のアリストテレス研究者たちの間で、『動物運動論』が非常に注目すべき著作であるという認識が広まったのは、おそらく、1978年のNussbaumの画期的な本<sup>6</sup>以来のことだからである。たとえば、Nussbaumの本以前の訳である岩波版アリストテレス全集の島崎訳では、『動物運動論』と『動物進行論』の解説が、合わせてたったの2頁しかない。いかに重視されていなかったかが分かるであろう。それゆえ、Nussbaumの本以前にこれほど『動物運動論』を重視できたのは驚くべきことなのである。いったい、ハイデガーは、『動物運動論』のどこに注目して、それほどの重要性を認めるにいたったのだろうか？

そこで、次のように問うてみたい——『動物運動論』の何がそんなに若きハイデガーの関心をひいたのだろうか？そして、なぜ『魂について』や『ニコマコス倫理学』よりもむしろ『動物運動論』が「広範な基盤」になると判断されたのだろうか？——これはおそらく、ハイデガーの専門家によっては問われたことのない問いであろう。しかし、初期ハイデガーのアリストテレス受容に関する新しい発見へといざなわれるような問いではないかと私は考えている。

## 第1章 『ナトルプ報告』への「付論 (Beilagen)」の分析の開始

### ——アリストテレスのどの著作のどの箇所へ何度言及しているのか

<sup>4</sup> Jaeger, W., *Das Pneuma im Lykeion. Hermes*, Bd.48, 1913. pp.29-74 (特にその「I. Die Schrift *Peri zoon kineseos* in ihren litterarischen Beziehung zu den Schriften des Aristoteles」(pp.31-42)) および Jaeger, W., *Aristotelis De Animalium motione et De Animalium Incessu. Ps-Aristotelis De Spiritu*. Leipzig (Teubner), 1913 によって。

<sup>5</sup> GA22, 308 (邦訳版全集、359頁)の「メルヘン筆記録」第83節。

<sup>6</sup> Nussbaum, M. C., *Aristotle's De Motu Animalium*. Princeton, 1978.

1989年の『ディルタイ年報』第6号に『ナトルプ報告』が発表された際には、この問いを追求する手がかりがほとんどなかった。しかし、2005年の全集第62巻<sup>7</sup>によって、その手がかりが与えられたと思われる。

まずは、『ナトルプ報告』の「付論」(GA62, 403-415)において、アリストテレスのどのようなテキストが、何回くらい言及されているのか、また、『動物運動論』に言及されている付論はどれか、などを調べてみるのが、手がかりになるであろう。それを一覧表にすると、次のようになる。

[発表ではこの表をいちいち読み上げることはせず、ざっと見てもらうだけにして、6頁の結論部分へジャンプします。]

#### GA62の「付論 (Beilagen)」で言及されているアリストテレスのテキスト一覧

##### 付論1

『ニコマコス倫理学』第6巻第13章

##### 付論2

『魂について』第3巻第10章

##### 付論3

『魂について』第1巻第4章

『ニコマコス倫理学』第6巻第2章 (2回)

『ニコマコス倫理学』第6巻第6章

『ニコマコス倫理学』第6巻第8章

『ニコマコス倫理学』第6巻第9章

『ニコマコス倫理学』第6巻第12章

『政治学』第1巻第5章

##### 付論4

『ニコマコス倫理学』第6巻第7章

『ニコマコス倫理学』第6巻第12章

『魂について』第3巻第3章

『魂について』第3巻第5章

<sup>7</sup> Band 62: *Phänomenologische Interpretationen Ausgewählter Abhandlungen des Aristoteles zur Ontologie und Logik; Anhang: Phänomenologische Interpretationen zu Aristoteles (Anzeige der Hermeneutischen Situation) Ausarbeitung für die Marburger und die Göttinger Philosophische Fakultät.* Frankfurt am Main, 2005.

『魂について』第3巻第10章

付論5

『魂について』全体

『魂について』第3巻第10章（2回）

『動物運動論』第6章

『動物運動論』第7章

『ニコマコス倫理学』第6巻全体

『ニコマコス倫理学』第6巻第2章

付論6

『動物運動論』第7章

『動物運動論』第11章

付論7

『形而上学』第6巻第1章

『ニコマコス倫理学』第1巻第7章

『ニコマコス倫理学』第6巻第2章（2回）

『政治学』第5巻第10章

付論8

『魂について』第3巻第10章

『ニコマコス倫理学』第6巻第2章（2回）

付論9

『魂について』第3巻第9章

『ニコマコス倫理学』第6巻第2章（2回）

付論10

『魂について』第1巻全体

付論11

『ニコマコス倫理学』第6巻第4章

付論12

『ニコマコス倫理学』第6巻第2章（4回）

付論13

『ニコマコス倫理学』第3巻第4章

『ニコマコス倫理学』第6巻第10章

付論14

アリストテレスのテキストは特に挙げられていない

〔ここから読み上げます。〕

以上、結論を述べれば、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章が最多で13回登場している（次に多いのは『魂について』第3巻第10章で5回登場している）。では、まず、ハイデガーが『ニコマコス倫理学』第6巻第2章（EN.VI.2）にこれほど多く言及していることの意味を明らかにして、本発表の解釈の方向性を定めよう。

## 第2章 ハイデガーが「付論」において『ニコマコス倫理学』第6巻第2章（EN.VI.2）に何度も言及する意図は何か——本発表の解釈の方向性

〔以下の「訳とコメント」を、発表ではいちいち読むことはせず、12頁へジャンプして、最後のまとめのところを読み上げて確認します。〕

### 『ニコマコス倫理学』第6巻第2章が出てくる「付論」の部分の訳<sup>8</sup>とコメント

#### T 1 : 付論3 「ヌース I」

全集62巻403頁の下から2行目から404頁の上から5行目まで

「人間の定義に注意を払え——プシューケー（魂）すなわちここではヌース（知性）をもつゾオン（動物）であるということに！／

そこ〔ヌース〕からエンテレケイア（完全現実態）を見ること。／

本来的に生を可能にすること、そして、生を導くもの——エン・テー・プシューケー・キューリア（魂の内の支配するものども）〔『ニコマコス倫理学』第6巻第2章 1139a17sq.〕——が、導くもの（1143b [35-36, キューリオテラー（より支配的）、あるいは、アルケイ・カイ・エピタッテイ（支配し指令する）〕、〔『ニコマコス倫理学』第6巻第12章〕として、おのれを存在において開示する（*offenbart*）のだ。／

つまり、人間の現存在（*Dasein*）は、世界へ—存在へ用立てられていることにおいて根本的に存立している（*der Grundbestand an Gestellsein zur Welt – zu Sein*）。

<sup>8</sup>原文のイタリックには傍点を付した。理解のため、「／」で、ハイデガーの原文にはない改行を行った（見やすくするため、段落と段落の間を1行あけることもある）。「[]」は、発表者による補い。箇所しか挙げられていないアリストテレスの著作は、対応する文を補った。なお、下線や囲みは発表者による。

始めに何もないのではなく、完全に見ること (volles Sehen) [ヌース] があるのだ」

**発表者のコメント1**：ここで、EN.VI.2 は、生を本来的に可能にし導くものがヌースであることを示すために言及されている。

**T 2**：付論3「ヌースI」

404頁16～17、18～21行目

「その [ヌースの] 二つの根本的な方向であるソピアー—プロネーシス。」  
 「ソピアー—プロネーシス：真実化の一固有化の諸遂行、諸時熟、諸動性。／  
 参照せよ、カト・ハース・ウーン・ヘクセイス [この複数形は二つ] マリスタ  
 (それゆえそれらによって最も [真理に到達させるようにするところの魂の] 諸  
 状態) (参照せよ、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章] 1139b12sq.)。』

**発表者のコメント2**：ここで、EN.VI.2 は、ヌースの二つの根本的な方向がソピアーとプロネーシスであり、両方とも真理に到達させるものであることを示すものとして使われている。

**T 3**：付論5「ヌースIII」

406頁17～19行目

「『ニコマコス倫理学』第6巻第2章] 1139a fin. [「しかしながら、思考それ自体は何も動かさない。動かすのは、何かを目的とした思考、すなわち行為に関わる思考である」] を参照せよ。」

**発表者のコメント3**：ここで、EN.VI.2 は、思考それ自体は動かさず、目的をもって実践する思考が動かすということを示すものとして使われている。

**T 4**：付論7「ディアノイア・プラクティケーI」

407頁7～8行目

「ディアノイア・プラクティケー——テオーレーティケー——ポイエーティケー (『ニコマコス倫理学』第6巻第2章] 1139a26sq. [「行為に関わるもの (プラクティケー) でもなく制作に関わるもの (ポイエーティケー) でもない『観想に関わる思考 (テオーレーティケー・ディアノイア)』の善し悪しとは、もっぱら

その真偽にある」。「他方、行為に関わる思考的なものの機能とは、正しい欲求（オレクシス）に一致している真理を捉えることである」]]。

**発表者のコメント4**：ここで、EN.VI.2は、「プラクティケー——テオーレーティケー——ポイエーティケー」という三つの言葉の用例として引かれているだけなのだが、「行為に関わる思考は、正しい欲求に一致している真理を捉える」という言葉から分かるように、行為と真理をつなぐものは欲求であることを述べている箇所であることが重要であろう。

**T5**：付論7「ディアノイア・プラクティケーⅠ」

408頁4～5行目

「キューリオン（支配するもの）・プラクセオース(I.)（行為を）・カイ（そして）・アレーテイアース(II.)（真理を）[参照せよ、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章、1139a18]としてのノエイン（思惟すること）」

**発表者のコメント5**：ここで、EN.VI.2は、真理も行為も支配するものが、ヌースの活動であるノエインであることを示すものとして引用されている。

**T6**：付論8「ディアノイア・プラクティケーⅡ」

409頁6行目

「ロゴス・ホ・ヘネカ・ティノス（特定のこゝのための道理）[[『ニコマコス倫理学』第6巻第2章 1139a32sq. [「ところで、行為のアルケー（始点）——すなわち、目的ではなく、動きのアルケー——とは、プロアイレシス（選択）であり、プロアイレシスのアルケーは、オレクシス（欲求）と、ロゴス・ホ・ヘネカ・ティノス（特定のこゝのための道理）である]]」]

**発表者のコメント6**：ハイデガーが直接に引用している言葉「ロゴス・ホ・ヘネカ・ティノス」だけからでは分かりにくいだが、EN.VI.2は、プロアイレシスがオレクシスとロゴスからなることを示すために言及されているとみてよいであろう。

**T7**：付論8「ディアノイア・プラクティケーⅡ」

409頁のハイデガー自身の注16

[[『ニコマコス倫理学』第6巻第2章] 1139b4 sq.、オレクティコス・ヌース（欲

求的な思考) =オレクシス・ディアノエーティケー (思想的な欲求) =プロアイレシス——「そのようなアルケーが人間なのである」を参照のこと。」

**発表者のコメント7**：ここでも、テキスト6と同じく、EN.VI.2は、プロアイレシスがオレクシスとロゴス(ここではヌース)からなることを示すために言及されているとみてよいであろう。

**T 8**：付論9「ディアノイア・プラクティケーⅢ」

410頁2～5行目

「ディアノイア・アウテー (思考それ自体) [参照せよ、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章、1139a35sq. [「思考それ自体は何も動かさない」]] ——ひたすらに認めて受け取ることそれ自体 (Durchvernehmen als solches) は、すなわち、純粹にただ見入りながら、アウテー、それ自身としては、その事実的な交渉からは解放されており、〈何も動かさない〉、つまり、行為へ何も導かないし、そこにそもそも気遣いの傾向 (Sorgenstendenz) はない」

**発表者のコメント8**：ここで、EN.VI.2は、思考それ自体は動かさないことを示すために言及されている。

**T 9**：付論9「ディアノイア・プラクティケーⅢ」

410頁下から3行目から1行目

「行為することの何であるか (*Das Was des Handelns*) ——行為することにおいて配慮的に気遣われていること——は、何のためにかということそのものである！何のためにかということ——行為すること自体、しかも、善きものとしてのそれ。エソメノン (成ること、未来のこと) ——エンデコメノン ([他の仕方でもあることが]可能なこと) [参照せよ、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章、1139b8]。」

**発表者のコメント9**：ここで、EN.VI.2は、行為の本質としての目的である善と可能性の関係を示すために言及されている。これは、行為の実践的三段論法による分析が、大前提に善を、小前提に可能なものをもつことを暗示している。本発表にとって重要な意味を持つテキストである。

**T 10と11**：付論12「ヌース・プラクティコス」

## 4 1 2 頁 5～8 行目

「参照せよ、[T 1 0 『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 2 章] 1139a18 [「行為と真理を支配するもの」、プラークシス (行為) —アレーティア (真理)。／

いかにして両者 [行為と真理] は決定的なものとして重なるのか、両者が関係しているのは何か?／

プロアイレシス (選択) である! [T 1 1 『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 2 章 1139] a23sq. [「プロアイレシス (選択) は、ブーレウティケー (思案に基づく) オレクシス (欲求) である」]。／

そして、これ [プロアイレシス] が、ここでは、人間の存在 (das Sein des Menschen) を意味するのだ。すなわち、欲しつゝ認めて受け取ること (ausseiendes Vernehmen) — 〈<sup>レ</sup>を気遣うこと (Sorgen um)〉。」

**発表者のコメント 1 0 と 1 1 :** ここで、EN.VI.2 は、行為と真理の両方を司るものがプロアイレシスであることを示すために言及されている。

## T 1 2 : 付論 1 2 「ヌース・プラークティコス」

## 4 1 3 頁 1～2 行目

「行為は交渉であり、したがって、何によってかということ、存在するものとして、真実化において与えること (das Womit als Seiendes in Verwahrung geben) なのである (参照せよ! 『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 2 章] 1139a17 [「行為と真理を支配するもの」])。』

**発表者のコメント 1 2 :** ここで、EN.VI.2 は、行為と真理が関係していることを示すために言及されている。

## T 1 3 : 付論 1 2 「ヌース・プラークティコス」

## 4 1 3 頁 1 1～1 6 行目

「参照せよ! 『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 2 章] 1139a33、アネウ・ヌー・カイ・ディアノイアス (「知性や思考がなく [性格としての状態もなければ、プロアイレシス (選択) はありえないのである」])。／

両者 (ヌースとディアノイア) が挙げられている理由! ヌースは、同時に何のためかということ (Weswegen) を認めて受け取ること (Vernehmen) である! ディアノイアは、これのためにとということ (Deswegen) をひたすらに認めて受け

取ること (Durchvernehmen) である」

**発表者のコメント 13** : ここで、EN.VI.2 は、目的を介してヌースとディアノイアを連続的なものとしてみることを示すために言及されている。しかし、プロアイレシスの成立に思考的なものと行為的なもの両方が必要であることを示す箇所であることも重要である。

以上で 13 個のテキストの検討は終わった。

さて、『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 2 章で言及されている箇所は、ベッカー版の順序で並べ替えて一覧表にすれば、以下のようになる。

#### 『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 2 章で言及されている箇所の一覧表

T 1、 1139a17 sq.

「魂の内の支配するものども」

T 1 2、1139a17

「行為と真理を支配するもの」

T 5、 1139a18

「行為と真理を支配するもの」

T 1 0、1139a18

「行為と真理を支配するもの」

T 1 1、1139a23sq.

「プロアイレシス (選択) は、ブーレウティケー (思案に基づく) オレクシス (欲求) である」

T 4、 1139a26 sq.

「行為に関わるもの (プラクティケー) でもなく制作に関わるもの (ポイエーティケー) でもない『観想に関わる思考 (テオーレーティケー・ディアノイア)』の善し悪しとは、もっぱらその真偽にある」。

「他方、行為に関わる思考的なものの機能とは、正しい欲求 (オレクシス) に一致している真理を捉えることである」

T 6、 1139a32 sq.

「ところで、行為のアルケー（始点）——すなわち、目的ではなく、動きのアルケー——とは、プロアイレシス（選択）であり、プロアイレシスのアルケーは、オレクシス（欲求）と、ロゴス・ホ・ヘネカ・ティノス（特定のことのための道理）である」

T 1 3、1139a33

「知性や思考がなく、性格としての状態もなければ、プロアイレシス（選択）はありえないのである」

T 8、1139a35 sq.

「思考それ自体は何も動かさない」

T 3、1139a fin.

「思考それ自体は何も動かさない。動かすのは、何かを目的とした思考、すなわち行為に関わる思考である」

T 7、1139b4 sq.

オレクティコス・ヌース（欲求的な思考）＝オレクシス・ディアノエーティケー（思考的な欲求）＝プロアイレシス——「そのようなアルケーが人間なのである」

T 9、1139b8

エソメノン（成ること、未来のこと）——エンデコメノン（〔他の仕方でもあることが〕可能なこと）

T 2、1139b12 sq.

ソピアー—プロネーシス。それらによって最も〔真理に到達させるようにするところの魂の〕諸状態。

〔以下を読み上げます。〕

以上をまとめれば、特定の箇所では、1139a17-18 が、最多で4回（T 1 : 1139a17 sq.、T 1 2 : 1139a17、T 5 : 1139a18、T 1 0 : 1139a18）言及されており、ハイデガーが『ニコマコス倫理学』第6巻第2章を読む際の根本的な観点を示していると思われる。それは、「行為と真理を支配するもの」である。ハイデガーは、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章で、行為に関わるものと思考に関わるものを統一する根本的なものは何かと探求するというテーマを見ていると解することができよう（また、ソピアーとプロネーシスの関係というテーマとも関係すると思われる。T 2 参照）。

そして、統一するものは、プロアイレシスであるとされ、プロアイレシスは、ロゴス（あるいはヌース、ブーレウシス（思案））とオレクシスからなるとされる（T 1 1、4、6、1 3、7）。

以上から、プロネーシスにおける思考に関わる要素と行為に関わる要素とそれらの関係を明らかにすること、いいかえると、プロネーシスにおけるロゴス（あるいはブーレウシス(思案)）という構造と其中でのオレクシスの位置づけを明らかにすることが、ハイデガーの課題ではないかと推測される。しかも、「思考それ自体は動かさない」に2回も言及している（T 8、3）ところから、力点は、動かすものであるところの、オレクシス、あるいは、その対象としてのオレクシス／目的の強調にあるのではないかと思われる（このような見通しからすると、T 9が重要になってくる。T 9のコメントを、25頁にいたったときに、注19がついたテキストとともに見よ）。

### 第3章 「付論5」および「6」の分析——「根本現象」としての「プロアイレシス（選択）」と実践的三段論法について

さて、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章、『魂について』第3巻第10章、そして『動物運動論』が登場するのは、「付論5」である。これに、『動物運動論』が登場するもう一つの付論である「6」を加えて、この二つの付論、「5」と「6」を、以下の考察の中心に置きたい。

#### 『ナトルプ報告』「付論5」および「6」（GA62, 406-7）の訳と注解

〔発表では、「付論5」および「6」の訳を逐一読み上げることは時間の関係上できません。確認したいのは、ハイデガー自身が明示的に「根本現象（Grundphänomen）」と呼んでいる「プロアイレシス（選択）」と、そして、表面的には分かりづらいが、実践的推論ないし実践的三段論法とが、論述の中心になっていることが分かるということです。〕

〔発表者のコメントを、14頁の「15番」から読み上げます。〕

#### 付論5 「ヌース III」

〔T 14〕『[ニコマコス] 倫理学 (Eth.[Nic.])』第6巻や『魂について』において、ヌース（知性）、ディアノイア（思考）、オレクシス（欲求）などが見られている様々な観点に注意を払え。

**発表者のコメント14**：以下、本論文において、「欲求」そして「欲望」という、よく似た言葉が出てくるが、「欲求」は「オレクシス」の訳で、「欲望」は「エピテューミアー」の訳であり、オレクシスの方が上位概念であって、「欲求」と「欲望」を混同してはならない。エピテューミアーは、オレクシスの一種であり、不合理な欲求である。

〔T15〕根本現象としてのプロアイレシス（選択）を参照すること。／

**発表者のコメント15**：アリストテレスは、「選択（プロアイレシス）とは、わたしたちに可能なものごとへの、思案した上での欲求（プーレウティケー・オレクシス）であろう。なぜなら、わたしたちは、思案した上で『判定・決断・決意（クリーネイン）』をしたときに、思案にもとづいて欲求することになるからである」（『ニコマコス倫理学』第3巻第3章 1113a10-12）と言う。つまり、プロアイレシスは、後で触れる「付論1」で注目されている「ヌース・プラークティコス（行為に関わるヌース）」が行う「思案すなわち推論（実践的推論ないし実践的三段論法）の結論としての決断という面をもつ。それゆえ、プロアイレシスと共に実践的三段論法に注目せねばならないのである（このようにしなければならない根拠は以下でも述べる）。

〔T16〕ヌースの根源的性格は、プラークティコスな（行為に関わる）ものであることだ。「ヌースとは、何かを目的としてそのために推論するもの、すなわちプラークティコスなものである」（『魂について』第3巻第10章] 433a14）。

**発表者のコメント16**：「何かを目的としてそのために推論する」というギリシア語テキストが引用され注目されていることによって、『ナトルプ報告』のアリストテレス論第2部の解釈において、合目的的推論、すなわち、実践的推論ないし実践的三段論法を取りあげることが正当化されるだろう。

〔T17〕「なぜなら、オレクシスが対象とするもの、それは、プラークティコス・ヌースのアルケー（出発点）であるが、[このヌースが実践的推論によって到達する] エスカトン（最終項）[が、今度は、プラークシス（行為）の出発点となるからである]」（[同、a15 以下]）—— [ここでの最終項とは] それ [実践的推論を行うヌース] の最終のもののことである。／

〔T 1 8〕〔すなわち、〕「認めて受け取り且つ存在を保管・真実化すること<sup>9</sup> (Vernehmen und Seinsverwahren)」、それは、或るもののために、つまり、何かのためということへ方向付けられていることにおいて、——この〔何かのためという〕態度とそのように〔何かのために〕行為することを共に遂行するものとしての根本現象〔プロアイレシス〕を終結させること〔実践的推論の結論を出し決断すること〕なのだ<sup>10</sup>！

**発表者のコメント 1 8**：「根本現象」とその「終結」について述べるこの箇所も、プロアイレシスと実践的推論に注目することを正当化するだろう。

〔T 1 9〕「求め (Aussein auf)」の対象<sup>11</sup>は、〈目的 (weswegen)〉という対象性格をもつ。／

〔T 2 0〕オレクシスのこの「求める行き先 (worauf)」(オレクトシ (欲求されるもの) のこと) は、実践的なヌースにとっては、「出発点 (von wo aus)」〔アルケー〕である。／

〔T 2 1〕だから、それ〔実践的なヌース〕は、これ〔行き先でもある出発点〕をもっているのでなければならない——それは、この〔行き先でもある〕アルケーを認めて受け取り保持するところのものなのである。／

〔T 2 2〕〔『ニコマコス倫理学』第 6 巻第 2 章〕 1139a 末尾〔「しかしながら、ディアノイアそれ自体は何も動かさない。動かすのは、何かを目的としたディアノイア、すなわちプラクティケー・ディアノイアである」〕を参照すること。／

〔T 2 3〕他の仕方でもあれでもこれでもありうるもののアルケー、すなわち、プラクテタ (行為に関わるものども) のアルケー！〔「これがオレクトシであるのだが、〕それ (オレクトン) を通じてディアノイアは動かすのである」〔『魂につ

<sup>9</sup> 「Vernehmen und Seinsverwahren」全体が、おそらく、根源的にプラクティコスだとされているヌースの動詞形ノエインの意識であろうと思われる。

<sup>10</sup>

<sup>11</sup> 「Der Gegenstand des Ausseins auf」は、おそらく、前の段落のギリシア語テキストの「フー・ヘー・オレクシス (オレクシスが対象とするもの)」の意識であろう。

いて』第3巻第10章 433a18-19<sup>12)</sup>]]。

**発表者のコメント23**：「動かすこと」への着目は『動物運動論』への着目を生み出すであろう。しかも、「オレクトン」、すなわち、オレクシスの対象を通じてであると言われているので、本発表第4章で論じるオレクシスの重要性も示唆されている。

〔T24〕出発点を、そしてもちろん真正にそれを「熟慮して (überlegend)」！  
この〈出発点〉は、「目標 (Ziel)」〔行き先〕という性格の内にあるのだ。

**発表者のコメント24**：この「überlegen」は、「ロギゼスタイ (推論を行う、勘案する)」や、それと同義の「ブーレウエスタイ (思案する、あれこれを考え合わせる)」の訳語ではないかと思われる。したがって、この「überlegen」という言葉も、アリストテレス論第2部の解釈において実践的推論を取りあげて正当化するだろう。

〔T25〕〔それに対して〕理論的なヌースは、〔実践的な〕テロスという性格の内にはない——〔あるいはむしろ〕端的な！〔理論それ自体が目的であるような〕テロスの内に！ある<sup>13</sup>——ところのもろもろのアルケーを探し求めて保つのだが、このことに対応して、それ〔理論的なヌース〕の「認取 (Vernehmen)」も別種のものなのである。対象の受け取り——価値を受け取る者。一般的に認取する——視を保ち視を与えることにおいて。アルケー——そこからそれぞれ存在するものを認取する。存在を保管 (真実化) し自分のものにするを一般に可能にする。

〔T26〕『動物運動論』〔第6章〕700b23以下〔「したがって、欲求されうるもの (オレクトン) であり且つ思考されうるもの (ディアノエトン) が、第一次的に動かすものだ。しかるに、思考されうるもののすべてがそうなのではなく (理論的なものはそうではなく)、プラークタ〔行為に関わるものども、すなわち目的と手段〕のうちの、目的であるものがそうなのである〕〕の鋭い分析を参照すること。

**発表者のコメント26**：「鋭い分析」という言葉から、『動物運動論』への評価の高さが

<sup>12</sup> GA62 の編者は、この箇所表記を補って来ていない。不親切である。

<sup>13</sup> ここにハイデガー自身が次のようなギリシア語テキストを挙げた注記がある。「『その目的は理論的なものである』(『動物運動論』第7章) 701a10) を参照すること！」。

うかがえる。

#### 付論6 「ヌース IV」

〔T 27〕「なぜなら、思惟と表象は、ちょうど先に述べられたように、諸々の受動的状態〔身体の状態変化〕を『作り出すものども（ポイエーティカ）』をもたらすから。つまり、受動的状態を作り出すものどもの形相をもたらすから」（『動物運動論』第11章〕703b18以下）。

**発表者のコメント27**：「身体の状態を作り出す」というのも「動かす」ことの一つであるから、この引用も、ハイデガーが「動かす」ことに注目していることの証拠である。

〔T 28〕ポイエーティコンとは？（プロタセイス・ポイエーティカイを参照すること〔『動物運動論』第7章701a23以下〔『作り出すことに関わる諸前提（プロタセイス・ポイエーティカイ）』は、二つの種類のものを通じて、すなわち、善いものを通じて、また、可能なものを通じて生じるのである〕を参照すること〕）。

**発表者のコメント28**：これは『動物運動論』において実践的三段論法の性格付けがなされている重要な箇所であり、ハイデガーがこの箇所を参照させていることも、アリストテレス論第2部の解釈において実践的推論を取りあげてを正当化するだろう。（後で注19を見よ。）

〔以下のまとめの文章は読み上げます。〕

さて、以上から、ハイデガー自身が明示的に「根本現象（Grundphänomen）」と呼んでいる「プロアイレシス（選択）」、および、（表面的には分かりづらいが）実践的推論ないし実践的三段論法が論述の中心になっていることが判明するであろう。

また、ハイデガーは『動物運動論』のどこに注目しているのかという問いに対しては、第6章、第7章、第11章が挙げられていることから、『動物運動論』の後半に注目していることが分かる。

ところで、『動物運動論』全体は、自然学と神学を橋渡しする『自然学』第8巻を受けて、天の運動と動物の運動を比較対照しながら、それらを動かすものが、それらの支

えになりながら外部に存在する必要性を説く第一章から第五章までの「前半」と、『ニコマコス倫理学』や『魂について』との関連で、動物において魂が体をいかにして動かすかを、欲求と思惟のはたらきに着目しながら実践的三段論法の形式で分析し、動物は「外部に存在する欲求対象に動かされつつ、欲求しながら自ら動く」という仕方で論じる第六章から第十一章までの「後半」に大きく分かれている。

したがって、『動物運動論』の後半に着目するが前半には言及しないということは、さしあたって、自然学や神学ではなく、倫理学（あるいはむしろ行為論）や魂論との結びつきを求めていることが分かるのであり、『動物運動論』の後半と同時に『ニコマコス倫理学』や『魂について』に多く言及していることは当然であったのである。

[以下の「T 2 9」と「3 0」はざっと見ていただくだけにして、先へジャンプ。]

なお、GA18『アリストテレス哲学の根本概念』に、ハイデガーが『ニコマコス倫理学』第6巻第2章のプロアイレシス論を重視している箇所があるので、証拠として引用しておきたい。

[ T 2 9 ]

「《プロアイレシス、つまり、決意していること (Entschlossenheit) は、語らぬような生き物には存在しない》。〔これは『ニコマコス倫理学』第3巻第4章（邦訳では第2章）1111b12-13をドイツ語に訳したものである〕 /

すなわち、プロアイレシスには、語ること (Sprechen)、つまり、思案すること (Überlegen) が属する。 /

思案を経た決意 (ein durch die Überlegung hindurchgegangener Entschluß) だけが、本来的な決意である。 /

決意とは、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章 [1139b5] においては、オレクシス・ディアノエーティケー（思想的欲求）、すなわち、《考察しつつ求めること (betrachtendes Aussein)》、考察し抜くことを通じて、つまり、思案することを通じて規定されているところの求めることである」(GA18, 145)。

また、GA19『プラトンの「ソピステス」』序論部にも、ハイデガーがプロアイレシスと実践的三段論法を結びつけている箇所があるので、これも証拠として引用しておきたい。

## 〔T30〕

「エピステーメーという意味での論証も、配視的に語るという意味で「勘案すること（ロギゼスタイ）」も、「三段論法（シュッロギスモス）」の構造をもつということが銘記されねばならない。／

「思案すること（プーレウエスタイ）」は、構造的に、三段論法において定立される。／

プロネーシスは、プロアイレシスにおいて起こる。それは以下のようなものである。／

第一前提（大前提）——そのために、つまり、或る善のために、——それが何であれ——、これが為されねばならない。／

第二前提（小前提）——しかるに行為の環境や状況はこれこれである。

結論——したがって、私はこれこれを為さねばならない」（GA19, 159）。

〔以下の文を読み上げます。〕

さて、プロアイレシス（およびその構造としての実践的三段論法）は、実際、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章、『魂について』第3巻第9章～第11章、そして『動物運動論』の後半、という、3つのテキストの中心テーマであると言える。そこで、「プロアイレシス」が登場する「付論」を翻訳し注解することが重要になる。それは、「付論1」、「5」、「8」、「12」、「14」である。

#### 第4章 「プロアイレシス」が登場する「付論」の分析

##### ——「オレクシス（欲求）」の重要性

〔ここは、コメントを中心に読み上げます。〕

「プロアイレシス」が登場する「付論」：訳とコメント

#### 付論1 「ヌース」

〔T31〕 *ヌーネ・プラークティコス*は、「実践理性（*praktische Vernunft*）」とは全く別の何かである——しかも後者が前者から導き出されたのだ。

それ（ヌース・プラークティコス）は、「環境世界の中で配慮的に気遣いながら

用務を果たすということのために且つそのことの中で<sup>14</sup>認めて受け取りつつ持つこと<sup>15</sup> (Vernehmend haben für und in umweltlichem besorgenden Erledigen)」なのである。

プロアイレシスを参照のこと。たとえば、『[ニコマコス] 倫 [理学]』第6巻第13章 (E[th.Nic.] Z 13) の諸難問を参照のこと。

**発表者のコメント 3 1** : ここでは、アリストテレスにおけるヌース・プラクティコスが、ステレオタイプな「実践理性」ではないこと、そして、「実践理性」はヌース・プラクティコスから派生したものであることが、プロアイレシスを参照すれば分かるとしているのであるから、プロアイレシスの根本性が、本付論の冒頭から提示されていることになる。また、ヌース、プラクシス、プロアイレシスの三者の関係が、この付論全体のテーマであることが暗示されている。また、『ニコマコス倫理学』第6巻第13章の難問とは、「人は生まれつき徳を備えているのか」、「すべての徳は知なのか」、「各種の徳は個々別々にそなわるのか」といった難問を指すと思われる。これらの難問を解いた後に、アリストテレスは、「プロアイレシスは、プロネーシスがなくても、徳がなくても、正しいプロアイレシスではないであろうことは…… [中略] ……明らかである」(1145a2-5) としている。少し強い言い方をすれば、プロネーシスは、たしかに重要ではあるが、プロアイレシスの構成要素であるとも言える。

(付論5は、すでに前章で検討済みである。)

#### 付論8 「ディアノイア・プラクティケーII」

##### [ T 3 2 ]

[ハイデガー自身による注記の中に以下のような記述がある]

『ニコマコス倫理学』第6巻第2章] 1139b4 以下の、オレクティコス・ヌース (欲求的な思考) = オレクシス・ディアノエーティケー (思想的な欲求) = プロアイレシス——「そのようなアルケーが人間なのである」を参照のこと。

<sup>14</sup> ここまでが「プラクティコス」の意識であろう。

<sup>15</sup> ここまでが「ヌース」の意識であろう。以下、「認めて受け取る」は単に「認取」と訳すこともある。「持つ」は、以下、「保管する (verwahren)」「保持する (behalten)」「保つ (halten)」とも言い換えられている。

**発表者のコメント32**：プロアイレシスにおいてオレクシスとディアノイアが分かちがたく結びついていること、そして、そのような複合的なアルケーとしてのプロアイレシスこそが倫理学の対象としての人間の本質であるとアリストテレスは考えているということが、『ニコマコス倫理学』からは読みとれると、ハイデガーは考えたのであろう。すなわち、プロアイレシスの根本性が、『ニコマコス倫理学』からは読みとれるとハイデガーは考えたのであろう。それに対して、『動物運動論』からは、プロアイレシスよりも一層根本的なものとしてオレクシスが読みとれるとハイデガーは考えたのではないかと私は主張したい。これについては後述するが、「付論8」からも、プロアイレシスの根底にオレクシスがあるとハイデガーが押さえていることが読みとれる（「付論5」でも、オレクシスに注目されていたのであった）。

#### 付論12「ヌース・プラークティコス」

〔T33〕参照せよ、『ニコマコス倫理学』第6巻第2章] 1139a18 [「行為と真理を支配するもの」、プラークシス（行為）——アレーテイア（真理）。いかにして両者は決定的なものとして重なるのか、両者が関係しているのは何か？プロアイレシス（選択）である！ [a23sq. [「プロアイレシス（選択）はブーレウティケー（思案に基づく）オレクシス（欲求）である」]] そして、これ（プロアイレシス）が、ここでは、「人間の存在（das Sein des Menschen）」を意味するのだ。すなわち、「欲しつゝ認めて受け取ること（*ausseiendes Vernehmen*）」——〈<sup>レ</sup>を気遣うこと（*Sorgen um*）〉。

**発表者のコメント33**：「付論8」への私の「コメント32」を裏付けるように、ここではっきり、「プロアイレシスが人間の存在を意味する」と言われている。すなわち、プロアイレシスの根本性が、『ニコマコス倫理学』からは読みとれるとハイデガーは考えたのであろう。

それに対して、『動物運動論』からは、プロアイレシスよりも一層根本的なものとしてオレクシスが読みとれるとハイデガーは考えたのではないかと私は主張したいのである。アイデアだけを大ざっぱに言えば、こういうことになる。

プロアイレシスは、人間に固有なものである。人間に固有なものを、人間としての人間の学、つまり行為する人間の学である倫理学が明らかにする。ここでは、『ニコマコス倫理学』がそれである。

しかし、アリストテレスによれば、人間に固有なものよりも、動物と共通するものの

方が、人間にとっていっそう自然本性的なのである。たとえば、次のように言われている。〔この引用文は発表では省略します〕

「また、夫と妻の間の愛も、自然的なものとして存在していると考えられる。なぜなら、そもそも家が国家よりも先なるもの、より必要なものであるかぎり、そして子どもを生むことが動物にいっそう共通な行為であるかぎり、人間というのは、自然本性的には、国家をつくるよりも、男女二人の関係をつくる傾向があるからである」(『ニコマコス倫理学』第8巻第12章 1162a16-19。朴訳。ただし、「友愛」を「愛」とした。)

しかるに、オレクシスは人間が動物と共通してもつものである。人間に固有なものではなく動物と共通してもつものを考察する本来の場所は、生物学であろう。ここでは『動物運動論』がそれである<sup>16</sup>。

さて、オレクシスが動物とも共通するものであるならば、オレクシスの方がいっそう自然本性に、つまり、ハイデガーの言う「人間の存在」に近いことになるのではないか<sup>17</sup>。

#### 付論 14 「存在の確保（真実化）とアルケーの先取。 ヌース（テクネーを参照のこと）」

〔T 3 4〕……〔始めの部分略〕……プロネーシスは、本来的にテロスへ向けた存在の確保（真実化）である。根本経験ではないとしても。しかし、両者〔配慮的気遣い（Besorgen）の行き先と出発点〕を切り離さないこと、すなわち、根本経験は、その明るみをもっている。根本経験は、常に、事実に「プロアイレシスの（proairetisch）」な状況の中に、その状況から出発して、且つ、その状況のために、あるのだ。……〔以下略〕……

**発表者のコメント 3 4 :**ハイデガーのアリストテレス解釈で注目されることが多いプロネーシスが「根本経験ではない」とされていることが注目される。配慮的気遣いを始め

<sup>16</sup> では、『魂について』はどうかという疑問が当然生じるであろう。『魂について』は、人間の魂だけでなく動物一般の魂を扱うことを課題としているからである。しかし、第3巻第11章に限定して言えば、『ニコマコス倫理学』と親和的であろう。

<sup>17</sup> しかし、だからといって、プロアイレシスが「人間の存在」でなくなるというわけではない。つまり、もっと一般的に言えば、人間の考察にとって倫理的考察が無用になるわけではない。

から終わりまで一貫させることが「根本経験」と言われている。そして、この根本経験を支えるのが、プロアイレシスという根本現象なのであろう。

それでは、アリストテレスの3つのテキスト（『ニコマコス倫理学』第6巻第2章、『魂について』第3巻第9章～第11章、そして『動物運動論』の後半）は、選択ないし実践的三段論法についてどのように説明しているのだろうか（なお、実践的三段論法の性格付けは、『ニコマコス倫理学』第7巻でも行われているので、これも検討する）。それを次の章でみてみよう。

## 第5章 『ニコマコス倫理学』、『魂について』、『動物運動論』における「実践的三段論法」論の特徴——そのことが若きハイデガーにとってもった意義について

『ニコマコス倫理学』第7巻や『魂について』第3巻は、実践的三段論法の大前提を「普遍」であるとしている。

〔引用文は、下線部を中心に読み上げる。〕

### 『ニコマコス倫理学』第七巻第三章

「われわれは、次のようにして魂の自然本性に即しても原因を見定めることができるかもしれない。すなわち、ある思いなしは普遍を対象とし、他の思いなしは個別的なものにかかわるが、個別的なものについては、すでに知覚が支配している。そしてこれら両方の種類の思いなしから単一の思いなしが形成されるとき、ある場合には、魂は結論された事柄を肯定するのが必然であるが、作ること、行うことにかかわる思いなしにおいては、魂は結論に基づいてただちに行為するのが必然である。たとえば、もし甘いものはすべて味わうべきであり、いまこのものが、すなわち個別的なものの一つであるこのものが甘いとすれば、その場合、行為する能力をもっており、かつ行為が妨げられることのないような人は、同時にまたこの特定の甘いものに関して行為することも必然なのである。そこで、われわれに味わうことを妨げる普遍的な思いなしが内在しており、他方、『すべての甘いものは快い』、しかるに『これは甘い』、という別の思いなし（こちらの思いなしが、現実に活動するのだが）も内在しており、また、甘いものへの欲望もたまたま内在しているとすれば、その場合、一方の

思いなしは、われわれにこの甘いものを味わうことを避けるように告げるが、欲望の方はわれわれを当の行為へと衝き動かすのである。なぜなら、身体の各部分を動かしうるのは欲望だからである」(1147a24-35) (朴一功訳)

『魂について』においてアクラシアーが論じられている証拠となるテキスト。第3巻第9章から。

〔ここは、「アクラテース」という言葉が登場することを確認するだけにする。〕

「思惟 [知性] が何かを避けたり追い求めたりすることを命じたり、思考がそうするように語ったりするときでさえも、ひとが動かされるというわけではなく、かえって、たとえば抑制のない人 (アクラテース) のように、欲望に従って行為するのである。…… [中略] ……けれどもまた、欲求もそのような動の決定的な要因というわけではない。その証拠に、抑制のある人 (エンクラテース) たちは、欲求しながらも、つまり欲望を抱きながらも、その欲求の対象となる事柄をおこなうのではなく、むしろ思惟 [知性] に従うのである」(433a1-9)

『ニコマコス倫理学』と同じく、『魂について』においても「大前提は普遍に小前提は個別にかかわる」とされていることが読みとれるテキスト。第3巻第11章から。

〔この引用文は全部読み上げる。〕

「判断であれ言表であれ、そのあるものは普遍にかかわるが、また別のものは個別的なものにかかわる。…… [中略] ……直接に動かすのは、この後者の〔個別的なものにかかわる〕思いなしであり、前者の普遍にかかわる思いなしではない」(434a16-19)

それに対して、『動物運動論』は、実践的三段論法の大前提を、欲求の対象である「善きもの」としている (701a23-25)。これが重要である。

〔下線部のみを読み上げる。〕

『動物運動論』第7章から

「思惟しても、行為する時と行為しない時があるのは、また、動く時と動かない時があるのは、どのようにしてなのだろうか。そのことは、まさに動かさ

れえないものどもについて思考し推論する人たちに似た仕方で起こるようである。しかし、その場合、目的は理論的なこと<sup>18</sup>——二つの前提を思惟する時、結論を思惟し結合するから——であるが、ここでは、二つの前提から行為として結論が生じる。たとえば、「すべての人は歩かねばならない、しかるに自分は人である」と思惟する時は、ただちに歩く。また、「何人も今は歩いてはならない、しかるに自分は人である」と思惟する時は、ただちに立ち止まる。そして、何ものも妨害あるいは強制しないならば、それらをどちらでも行うのである。……〔中略〕……しかるに、作り出すことに関わる諸前提は、二つの種類のものを通じて、すなわち、善いものを通じて、また、可能なものを通じて生じるのである<sup>19</sup>。」(701a7-25) (坂下訳)

〔注19を読み上げること。〕

3つの著作の三段論法に関わる箇所を比べると、「大前提が善、小前提が可能」という論点が『動物運動論』で一番明瞭である（他の二著作にそれが全然ないというのではない<sup>20</sup>）。このことが理由の一つとなって『動物運動論』が「広範な基盤」とされた、と

<sup>18</sup> ハイデガーが「付論5」の注で引用した箇所。

<sup>19</sup> ハイデガーが「付論6」の本文で参照を指示している箇所であり重視すべきである。

<sup>20</sup> 『魂について』第3巻第10章から、実は『魂について』からも、欲求の根本性が読みとれる（表象の重要性も読みとれて興味深い）、そしてハイデガーが引用してもいるテキスト。「しかしともかく、少なくとも、欲求にせよあるいは思惟〔知性〕にせよ、これら二つが動きを生み出すということまでは明らかである——もしひとが表象のはたらきを一種の思惟活動として考えるという条件のもとでは。というのは、多くの場合、人々は知識に背いて表象のはたらきにつきしたがうのであり、また人間以外の動物においては、思惟活動も推論も存在しないが、表象のはたらきは存在するからである。したがって、思惟〔知性〕と欲求というこれら両方のものが、場所的な運動を引き起こすことのできるものである。〔以下がハイデガーの引用している箇所〕ただし、この思惟〔知性〕とは、何かを目的としてそのために推論するもの、すなわち『行為にかかわる思惟〔知性』であり、『観想にかかわる思惟〔知性』とは目的の点で異なっている。そして、欲求も、すべて何かを目的とする。なぜなら、欲求が対象とするものは『行為にかかわる思惟』の始原〔出発点〕であるが、この思惟が到達する最終項が行為の始原〔出発点〕となるからである。したがって、この二つ、つまり、欲求と、行為にかかわる思考とが、動かすものであるというのは、もっともな理由があるように思われる。なぜなら、欲求されるものが動かすのであり、そして思考が動かすのは、欲求されるものが思考の始原〔出発点〕であるということに基

いう仮説を立てることができるであろう。

また、『動物運動論』の場合、大前提が善という欲求対象であることから、欲求の根源性が示唆されるだろう。そのことが読みとれる『動物運動論』のテキストは、次の通りである。

『動物運動論』第7章から

「(1a)『私は飲まねばならない』と〔欲求の一種である〕欲望が言う。

(2a)『これが飲み物だ』と知覚または表象あるいは知性が述べる。

(3) ただちに彼は飲むのである。

それでそのような仕方で動物は運動あるいは行為し始めるのであり、

(1b) 運動の究極の原因が欲求である一方、

(2b) 欲求が生じるのは、知覚を通じて、あるいは、表象や思惟を通じてである」(701a32-36) (坂下訳)

(1a) (1b) から、実践的三段論法の大前提の表現主体は、欲望であることが——欲望は欲求の一種であった(700b22)から、一般化すれば、欲求であることが——分かる。また、(2a) (2b) から、実践的三段論法の小前提の表現主体は、知覚、表象または思考であることが——700b19-20によって一般化すれば、知性であることが——分かるであろう。

さて、欲求は、細川先生の指摘されるとおり<sup>21</sup>、「気遣い (Sorge)」という概念に対応するギリシア語だと考えられる。以上から、『ナトルプ報告』第二部構想の「特定の動

---

づく。そして、表象のはたらきも、それが動かすときには、欲求を伴わずに動かすことはない。

したがって、動かすものは、或る一つのもの、すなわち、欲求する能力である。なぜなら、もし二つのもの、すなわち思惟[知性]と欲求が動かすというのなら、その動かすということは、両者に共通の何らかの形相に基づくものであつただろう。しかし実際には、思惟[知性]は欲求を抜きにして動かすことはないことは明らかである。というのも、願望 (ブーレース) [理性的な欲求]は欲求 (オレクシス) であり、推論に基づいて人が動かされるとすれば、また願望に基づいても動かされているからである。これに対して、欲求の方は推論に反しても、ひとを動かす。なぜなら、欲望 (エピテューミア) は欲求の一種だからである」(433a9-26)

<sup>21</sup>細川亮一『ハイデガー哲学の射程』、創文社、2000年、pp.90-91。

性」とは、欲求すなわち気遣いが根本となる動性であり、「気遣い (Sorge)」が現存在にとって根本的である——現存在の存在である——という考えは、少なくとも一つの源泉として、アリストテレスにおいて「気遣い」に相当するとハイデガーが考えていたと思われる「オレクシス (欲求)」の対象を実践的三段論法の大前提に明確にすえる『動物運動論』から生じてきたのかもしれない (本発表の〈仮説1〉)。

さらに、『ナトルプ報告』で『動物運動論』に触れた後のパラグラフで、ハイデガーは、範疇の起源を、ロゴスそのものや事物にもとめるのではなく、「用務を果たす上で配慮される関わり合いの対象<sup>22</sup>」に求めており、『カッセル講演』に資料として付された書簡の言い方だと、「ギリシアの存在論と論理学とを解体する<sup>23</sup>」ことを目指している。『魂について』よりも『動物運動論』を「広範な基盤」とみるということは、普遍の起源を、欲求という現実活動態に、個別の起源を、欲求実現の可能性に、それぞれ求めることになる<sup>24</sup>。したがって、『動物運動論』は、〈存在論と論理学の解体〉という『ナトルプ報告』の最終的な大きな目的を実現するために必要不可欠な視点を提供したのではないだろうか (本発表の〈仮説2〉)。

[本編のおわり]

[以下の「付録」は時間の関係で読めないかもしれないが、概要だけは述べたい。]

## 第6章 生と世界を関係付けるものとして若きハイデガーが生物の「進行方向」に着目していることについて

### ——世界への生物の依存と世界の生物による再構成、『動物進行論』の意義

最後に、1926年夏学期の講義『古代哲学の根本諸概念』で『魂について』論の著作

<sup>22</sup> 高田訳 40 頁、GA62,398。

<sup>23</sup> 後藤嘉也訳『ハイデgger カッセル講演』、平凡社ライブラリー、2006年、185頁。全集62巻のタイトルの「zur Ontologie und Logik」(存在論と論理学のための)とは、「存在論と論理学を解体するための」という意味なのであろう(余談だが、私は、本の実物を手に取るまで、「存在論と論理学のための」を文字通りに受け取っていたので、全集62巻はオルガノンの解釈を行っているのだろうと勘違いしていた)。

<sup>24</sup> 欲求が普遍の起源であるとは、いかなることか。「普遍(カトルー)」とは「全体(ホロン)に関わる(カタ)もの」であるので、「行為の全体を始めから最後まで支配するものが欲求であり、論理的な普遍(類や種として全体に関わるもの)はここから派生してきた」と、「論理学の解体」を目指す若きハイデggerはしたかったのかもしれない。

リスト (GA22, 183) に『動物運動論』だけではなく『動物進行論』が加わっており、また、『存在と時間』刊行後の1929年の演習題目も、「上級：生の本質について、アリストテレスの『魂について』『動物運動論』『動物進行論』を特に考慮して」となっている<sup>25</sup>ことの意味——『魂について』の後は『自然学小論集 (Parva Naturalia)』に収録されている『感覚論 (De Sensu)』と『記憶論 (De Memoria)』を取り扱うのが伝統的なやり方であるのにハイデガーはその伝統に逆らっているようである——を、ほとんど知られていない『動物進行論』の生物的世界論を紹介しながら考察してみたい。ポイントは、ハイデガーが生と世界を密接に関係させるとき、ある時から、生が「方向」を持つことと世界を持つことに着目していることにも目を向けていくべきではないか、「方向」に着目することと『動物進行論』に着目することは連動している可能性が高いのではないか、ということである。

さて、本発表の前章までは、『魂について』第3巻と『動物運動論』の後半の話であったが、『動物運動論』前半も、『魂について』とは直接関係ないが——したがって、有名な『魂について』だけを読んでいても見えてこない——興味深い話題がある。それは、動物は、動くことにおいて、世界に支えられ動かされるという意味で、世界に依存せざるを得ないことの分析である。この点がハイデガーとの関係で重要であって、これと関係するのが『動物進行論』の生物的世界観である。『動物進行論』との接点を示唆するハイデガーのテキストは、以下の通りである。

全集22巻『古代哲学の根本諸概念』「メルヘン筆記録」第84節から。

生きることと方向性をもつこと、そして世界を持つことについての記述。

[このテキストは重要なので全部読み上げること。]

[ T 3 5 ]

「生きること〈ゼーン〉は、存在論的な根本概念である。魂も、この意味で捉えられねばならない。／

生きものがあると言えるのは、それが或る方向感覚をもって動いている場合である。…… [中略] ……／

自分の周りの存在者とながっていく。…… [中略] ……方向を定める可能性…… [中略] ……。生きものは、つまり、或るものと一定の連関をもっているも

<sup>25</sup> Kisiel, T., *The Genesis of Heidegger's Being and Time*. University of California Press, 1993. pp.467,475.

のは、その結果、今日言うところの、世界を持つことになる。／

生きもののなかのいくつかのものは、その場所に縛られているが、他のものは移動することができる。しかも、これは無生物の場合とは異なる場所の変更の仕方である。進行運動〈キーネーシス・ポレウティケー〉（参照。『魂について』第3巻第9章〕432b14）、生命にとって何らかの意味で重要な或るものへ向かって動くこと、つまり、その度毎に周辺世界の中で方向づけられた動きをすることである」（GA22, 309、邦訳全集359頁）

**発表者のコメント35**：『魂について』第3巻第9章に言及されていることでも注目されるが、このテキストによると、方向を持つものが、世界を持つことになる。また、進行運動への着目からは、『動物進行論』への着目が自然と生じるだろう。そして、方向付けへの着目からは、『動物進行論』における生物にとっての世界内での方向とはいかなるものかの考察への着目が生じるだろう。

『動物進行論』第4章から〔この引用文は、全部読み上げる。〕

「さて、動物が自然本性的に規定される延長方向の数は六つである。すなわち、上と下、前と後、さらにまた右と左があるのだが、上と下の部分はすべての生物<sup>26</sup>が持っている。上と下は、動物だけではなく、植物にもあるからだ。そして、六つの延長方向は、働きによって区分されるのであって、単に大地と天への関わりにおける位置によってではない<sup>27</sup>。なぜなら、各々の生物にとって栄養物の分配と成長が始まるところが働きの点で上なのであり、それが最後に終わるところが働きの点で下なのであるから。すなわち、一方は一種の始点であり、他方は限界点〔終点〕であるが、上が始点なのであるから。しかるに、植物にとっては、むしろ、下が始点であると考えるのが適切であろう。実際、植物と動物の場合、上と下が位置的には異なるから。しかし、植物と動物は、世界全体との関係においては異なるが、働きの点では同様なのである。というのは、植物にとっては、根が、働きの点では上部なのであるから。すなわち、根から、栄養物が、植物の成長する諸部分へ分配されるのであり、栄養物を、根によって、ちょうど動物が口によ

<sup>26</sup> ここでは、「動物（ゾーオン）」と「植物（ピュトン）」を合わせた概念として、「生物（ゾーン）」が立てられている。

<sup>27</sup> 『動物進行論』の根本思想。動物の体の方向は、物理的な位置関係によってではなく、機能によって決まるという興味深い考えが述べられている。

ってそうするように、取り入れるからだ。」(705a26-b8)

生物にとっての世界の方向性は、生物の働きによって規定されるので、物理的に存在する世界とは異なることが主張されている。

『動物運動論』によれば、生物は世界に必然的に依存するのであるが、『動物進行論』によれば、その世界は生物ごとに再構成されるのである。これは、『動物運動論』前半と共に、生と世界の密接な関係を示唆する。

現存在と世界の関係の思想の生物学上の源泉は、木田先生の指摘以来よく知られるようになったユクスキュルだけではなく、『動物運動論』と『動物進行論』も考えられるのではないかと(本発表の〈仮説3〉)。

次に、初期ハイデガーのテキストにおける生と世界の関係を見てみよう。

[時間がなければ、以下は省略。]

『ナトルプ報告』と同時期(1921/22年冬学期)の講義『アリストテレスについての現象学的解釈：現象学的研究への入門』では、生と世界の密接な関係が主張され、その連関が「気遣い」だとされている(GA61,90の第一段落)。

また、1924年夏学期講義の『アリストテレス哲学の根本諸概念』では、生物を「世界内存在」の意味にとっている。すなわち、「生きているもの」を、「或る世界内に存在するという意味における存在」と言い換えている(eines Lebenden, d.h. eines Seins im Sinne des In-einer-Welt-Sein)(GA18, 30)。

これら2つの箇所は、小野先生も引用するテキストである<sup>28</sup>。

また、ハイデガーが早くから生と世界を結びつけているというだけではなく、時代別に力点の違いがあるように見える。

始めは、「私たち」人間中心で生と世界を見ている(ディルタイの生の哲学との関係でそうなのであろうか)。

<sup>28</sup> 小野紀明「初期ハイデガーにおける運動概念(下)——アリストテレスの脱構築的解釈をめぐって——」、『思想』、986号、2006年、pp.99,103。

全集58巻『現象学の根本問題（1919／20年）』から、「私たちの生」

〔T36〕「私たちの生は、そこで私たちが生きているところの世界なのである。  
…〔中略〕…私たちの生は、その生が或る世界の中で生きている限りにおいての  
み、生として存在するのだ」（GA58, 34）

後に、動物一般から人間の場合を反省するというようになったのではないか。

しかし、なぜ生と世界が関係するとそもそも考えたかは、ハイデガーの講義原稿を読んでいるだけでは、それほどはつきりとは分からない。

若きハイデガーがアリストテレスの『動物運動論』『動物進行論』を読んでいけばこそではないかというのが私の考えである。

中期のニーチェ講義でも、生物にとって「地平形成」が本質的だという主張が見いだされる。

全集47巻『認識としての力への意志についてのニーチェの教説』（1939年夏学期講義）

〔T37〕「地平形成は、生けるものそれ自身の内的な本質に属する  
（Horizontbildung gehört zum inneren Wesen des Lebendigen selbst）<sup>29</sup>」（GA47, 164;  
GA6.1, 516）

それゆえ、生と世界の関係、生物の世界再構成は、中期思想にまでおよぶ重要な考えであると言えよう。

（了）

---

<sup>29</sup> この引用文は、安部浩『「現」／そのロゴスとエートス——ハイデガーへの応答——』、晃洋書房、2002年、85頁でも重視されている。